詩作

リズムが息づくバス停

「和とは」

和とは「間」。私たちはこの答えにたどり着いた。

日本は様々なところで「間」を使っている。しかし「間」を作っているものに目を向けることは少ないと考えた。そして、その中から「間」を作り出すリズムに着目し、詩歌を作る行為である「詩作」に着目した。

「詩作」は技法をつかってリズムを生み出し、音律によって空間の流れを作っている。そして「間」を作る。それは建築にも言えるのではないかと考えた。

そんな「詩作」という技法を使ったバス停を提案する。

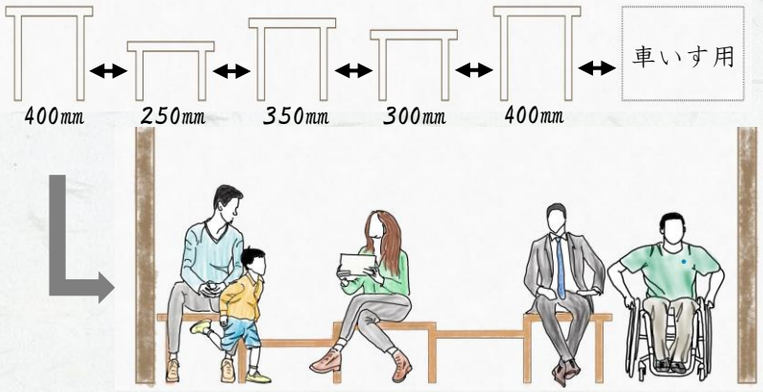
建設地

着物観光で人気な栃木県にある日光東照宮の西参道と本道につながる場所にあるバス停

帯の間

着物の帯の部分を「帯の間」という棚にした。ここには、地域のポスターやお知らせを掲示できるスペースとなり、まちや日本の情報発信の場として機能する。伝統と今をつなぐ帯が人々をつなぐ新たなコミュニケーションの場を創り出す。

動きを持たせ音律を感じる



各年代の大きさに合わせた高さの椅子をいくつかつないでベンチを作り、誰もが快適に座れるようにした。また椅子の高さをばらばらにすることで空間に流れを生み出した。
そうすることでこの空間で会話という動きが生まれ、感情という詩のような情感も生まれ、音律という空間の流れを感じることができる。

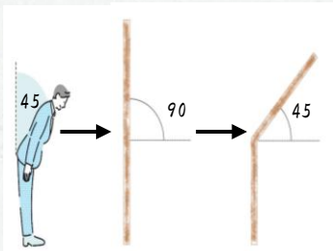
温もりを映す空間

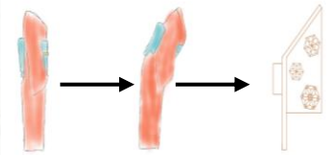
障子のような温かみと調和を感じる昔ながらのデザイン。
それを現代風にガラスにした。
それによりガラスの反射や透過で見える人や自然の温かみ。
そして木の質感によって昔とは異なる現代の温かみと調和を感じるデザインを作った。
これにより現代と昔を融合させた空間に作り上げた。

修辞美と表現空間

隠喩・換喩・掛詞

～お辞儀と屋根と伝統工芸～



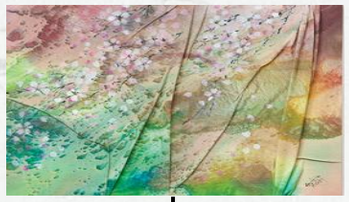


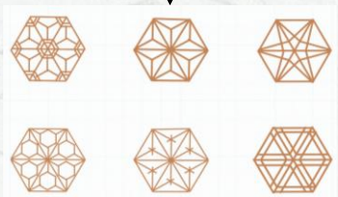
日本の親しみのある伝統文化であるお辞儀。それを屋根に生かすことで、和を空間の流れにより感じる。

栃木県の伝統工芸である「染織物」と「鹿沼の組子細工」を組み合わせた。形状を着物のシルエットにし、模様に組子細工を生かす。

漸層法

～着物模様と組子細工～

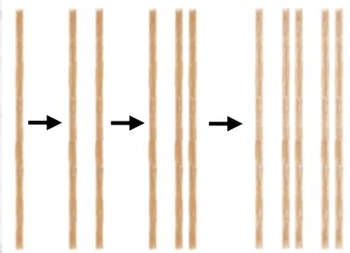




着物の模様を組子細工に置き換える。そして漸層法が文の表現を徐々に強めていくように、模様である組子細工をちりばめることで、バス停を伝統という表現で強めていく。
しかし、和というのは調和が大切だと思い、桜などの草花の形を組子細工を取り入れた。

反復法

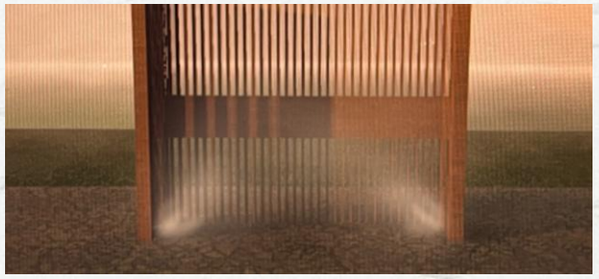
～ルーバーで生むリズム～



バス停の壁や屋根のほとんどをルーバーにした。
その間隔をあえて不規則にして、反復法のように連続して配置した。

対句法

～ひかりの融合～



かつて、蝋燭などの灯が人々の道を照らしていた。現代はLEDが道を照らす。
昔と今がひかりによって融合する。
ひかりによって生まれる影で、浮かび上がる模様。それをバス停で待つ人たちが安らぎを感じながら待つようなバス停を目指した。